

社会福祉事業の先駆者

留岡幸助

児玉
享

少年期の留岡幸助

留岡幸助が生まれたのは明治維新の4年前の元治元（1864）年で、高梁は松山藩の城下町として、備中の中心地として栄えていた。

藩主板倉勝静は江戸幕府の老中としても活躍、その絶大な信頼のもとに山田方谷が藩の財政・人心

を立て直し、安定した政治が行われていた。

しかし、江戸幕府が慶応3（1867）年に大政を奉還した後、戊辰戦争が起こった。この混乱期に松山藩は朝敵とみなされて、一時備前藩の支配下におかれた。明治2（1869）年に高梁藩として復活したが五万石は二万石に減らされ、その後明治4年の廢藩置県によつて藩はなくなり、



高梁中央公園（柿木町）にある留岡幸助顕彰碑

多くの藩士は東京など他地域に職を求めて移転、商人や職人も需要の多い都市部に移るなど激動の時代となつていった。幸助は高梁の新しい町の髪床屋（理髪店）をしていた吉田万吉とめ夫婦の4番目の子供として生まれた。南町で米商人をしていた、親戚の留岡金助・



勝夫婦に子供がなかったので、生まれる前からの約束で、生まれるとすぐに養子となった。

留岡夫婦はちょうど近くの新丁（現弓之町）に住む土族、国分胤之夫婦に頼み、もらい乳をした。国分家では3カ月前に子供三亥（法律家、高梁市初代名誉市民）が生まれたばかりで母乳がよく出るので、幸助にも分け与え、可愛がついたという。幸助は8歳から近くの

新丁の伊藤という寺子屋に通った。四民平等の時代となつて武士の子も町人の子も一緒に学んだが、身分制は依然として意識や生活の上で存続しており、旧藩士の子は木刀を腰にして通学していた。ある日寺子屋帰りに口論となり、木刀でなぐられた。町人の子の幸助は素手であったので、木刀を握っている相手の手をつかんでかみつき、藩士の子は泣きながら帰っていった。翌日幸助の

父は相手の家に呼びつけられ、出入りの差し止めを言われた。有力な得意先を失った父は幸助を激しく叱り、散々にたたいた。幸助は防衛上かみついただけなのに、これほどの仕打ちをする旧土族に激しい敵意をもつようになった。

まもなく学制が公布され、全国に小学校ができる。彼も小学校に通うようになるが、12歳の時にやめて行商に入り、商人の第一歩を踏み出すことになる。しかし、行商中も背中の籠に漢学の本を入れて休む時は読み、治国平天下を目指したというほど学問好きで、正義感が強く、年に何回か来る軍談や講談が大好きで必ず聴いていたという。

新しい思想に興味関心を持ち、自分が思ったことにつき進む意志の強い子供であった。

同志社から牧師へ

留岡幸助は明治18（1885）年9月、同志社英学校別科神学科邦語神学課程に入学した。彼の立場に配慮した高梁教会は月4円50銭の奨学金を送って支援した。幸助は当時最低3円あれば生活できたので、1円50銭を将来の妻、夏子に送り、神戸の伝道学校で学習させている。同志社の新島襄校長



幸助が学んだ同志社大学校舎

「新島さん」と呼ばせ、皆同じ人間として平民主義を主張した。当時、同志社は人への愛をもつて働くこと、人への奉仕こそ神への奉仕であるといった考え方で、新島の常用語は「世の中の為に」であり、その実践を重視した。こうした空気の中で社

は、彼が米国の学業・生活で得た人格の尊重、自主・自立の精神を養う場として、寮を重視した。全寮制とし、寮では上級生が下級生の面倒をよく見ている。授業は英語が主で、学生中心にお互いに磨き合った。土・日曜は自学自習、健康増進、精神修養に当てられ、周囲の山々を散策し、演説会が開かれた。開拓伝道も行われ、幸助も成羽・井原で伝道している。新島は学生に



幸助に影響を与えた新島襄

会福祉事業に入った先駆者として、留岡幸助の他に、石井十次や山室軍平がいる。石井は岡山に孤児院を創り、家庭的環境の中で孤児たちを育て、教育している。山室は救世軍に入隊して恵まれない人々を救い、病院や施設を建設するなど社会福祉事業活動を展開している。留岡幸助と山室軍平は備北の出身者とともに高梁教会に縁が深い。幸助は洗礼を受け、軍平は同志社から2度伝道に訪れている。岡山県は社会福祉の先進地域といえる。

島に招かれ、病院や看護婦学校を開いていたが、日本の監獄が極端な懲罰主義であることを知り、その改良を政府に進言している。幸助がベリーからこの方面に関して多くの示唆を受けたと思われる。また、同志社の教師ゴルドンは学生に社会事業への関心を向けさせ、監獄改良・非行少年教護といった、当時世間が無関心だった分野に光をあてる仕事を示し、後に幸助が家庭学校を創る時に資金援助している。

幸助は友人から「十二英傑伝」という洋書を借りて読み、その中に出ている監獄改良家ジョン・ハーワードに心を留めている。世の中の暗黒面の2つのうち1つは監獄で、それに光をあてて改善を目指す話に感動し、将来その方に進むことを考えている。

以上のように留岡幸助は同志社時代に多くの師や友人、書物から大いに学び、考え、自分の進むべき世界を模索していった。

明治21（1888）年6月、同志社を卒業後、招かれて京都・福知山の丹波第一教会に赴任した。北は福知山から南は亀岡に至る6つの講義所を一人で担当、三十余里（百キロ以上）の道を歩いて回り伝道し、多くの信者を得ている。明治22年に夏子と結婚し、「妻は良き相談相手なり、助言者なり家内の主人なり」と言っている。翌年には長男も生まれ、安定した生活に入っていた。

そこに金森通倫牧師を通して北海道空知集治監（現在の刑務所）の大井上輝前・典獄（現在の刑務所長）から同志社出身の教師を求めてきた。同志社在学中からの念願であったので、教会員の反対を押し切つて北海道行きを決行した。それを力づけたのは夏子の「あなたの使命なら私はついて行きませぬ」の言葉であった。

一路白頭に到る

明治24(1891)年4月、空地集治監の教誨師として夏子と長男敏を連れて赴任した。ここは全国から政治犯や凶悪な犯罪者を收容、強制労働させていた。教誨師は受刑者人間としての道を示し、前非を悔い、よい心をもって世の中に出て行くよう指導する。彼は個人と話す密房教誨を熱心を実施し、家庭事情や動機などを聴けるまでに彼らと心を通わせ、信頼を得ている。その中で重罪人の7、8割は少年時代に悪の道に染まっていたことを知る。若い

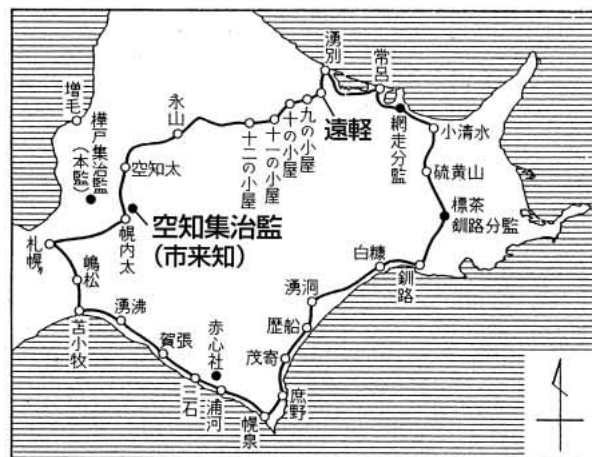
時期に教育し、改善・教化することが必要であると痛感した。

幸助は明治24年初秋、北海道各地の監獄の様子を知るため、47日間の一周旅行を行った。各地の受刑者の鉱山労働や道路、鉄道の建設の厳しい労働で多くの犠牲者が出るなど受刑者への懲罰主義の実情を見て、欧米の監獄制度の实情を知りたい思いが、ますます強くなった。

監獄学の研究が急務と悟った幸助は明治27(1894)年5月、2年間勤めた空地での教誨師を辞任し、自費での学習渡米に踏み切った。わずかな家財道具を売り払って費用を捻出する彼に、同僚たちは饒別80円を贈り、札幌の宣教師カーチスは300円を出してくれた。横浜港から英国船で船出したが、資金が乏しいため



北海道家庭学校校庭にある留岡幸助の胸像。台座に「一路到白頭」と刻まれている。



留岡幸助の北海道一周

でもらった。暇を作つて図書館で勉強する中で、岡山県出身の後の社会主義者・片山潜と知り合い、10日ほど共に暮らしている。

その後、学資の援助を受け、通信員の資格で手当てを受けながら見学学習を続けた。明治28(1895)年5月、念願のニューヨーク州エルマイラ感化監獄の典獄ブロックウエーを訪ねた。彼はずっと監獄に勤め、不定期主義のエルマイラ感化監獄を作った人である。獄内には農場、工場など30余種の実業教育がある。幸助はつぶさに施設を見学し、創設者の人格、思想に感銘を受け、科学的な監獄改良の筋道を学んだ。ブロックウエーは「私はただ一つのことをやっているだけ、しかし、それを成し遂げるにはたゆまぬ努力と長い時間が必

4等船客となり船倉で粥と豚汁で過ごし、カナダのバンクーバーに着いた。それからアメリカ大陸を汽車で横断し、ボストン近郊にあるコンコルド感化監獄に到着した。そこでは16〜25歳の初犯者を入れ、工場、農耕など労働に従事させながら精神の改善を図っている。幸助は監長に自分の目的を述べ協力を願った。無一文に近いので工場で囚人と共に働き、生活と研究の機会を与え

要。我この一事に励むが座右銘です」と言う。これを聞いて幸助は、感化教育を一生の仕事にする決意を固め、「一路白頭に来る」を座右銘とした。

明治29(1896)年、2年間のアメリカ留学を終えて帰国すると感化院創設に全力を傾注していく。内務次官で大感化院の構想を持つ三好退蔵と設置に動き始めたが、幸助がキリスト教を前面に出すことを主張したのに三好は反対し、暗礁に乗り上げた。

翌年、幸助は東京の靈南坂教会の牧師になった。彼の話を聞いた信徒の中に強力な支援者が出て、感化学校創設の話が進展した。巢鴨に3600坪の土地を見つけ、恩師ゴルドンの10000円の寄付と借入金22000円、計32000円で購入する運びとなり、幸助が「家庭学校」と名付けた感化学校が誕生した。

家庭学校と共に

明治32(1899)年11月、35歳の留岡幸助は東京の自然林に富む巢鴨村に念願の家庭学校を創立した。翌年生徒一人、教頭一人、校長とその家族での出発である。この一人の生徒を可愛がっていた妻夏子は4月に34歳で亡くなった。その悲しみを乗り越え、校舎建設の寄付金集めに奔走、次々と家庭舎が建てられ、生徒も増加していった。

家庭学校では多くの課題を持った8〜16歳の少年を受け入れ、生活を共にして指導する。日課は5時半起床、6時礼拝、8〜12時授業、13〜17時作業、夕食、休憩の後自習し20時就寝となる。感化教育の三要素として、よく働き、よく食べ、よく寝ることを実践した。教師と生徒の共同生活は苦闘の連続で、さぼり、うそつき、脱走など、身についた悪癖を持つ子と

闘う毎日であった。

その一方で、敷地内に苦学生を援助する思斉塾や教師養成の慈善事業師範部も併設した。

明治36(1903)年から半年程、社会事業視察のため渡欧し、先進国の監獄制度、感化事業を学んで帰っている。明治38(1905)年には、月刊誌「人道」を創刊、病に倒れるまでの27年間、社会問題、感化教育の大切さを論じ続けた。

大正2(1913)年、創立15周年記念式を徳富蘇峰など多くの援助者を招いて盛大に行った。この年までに入学者は230名を数え、そのうち退学者32名、逃亡23名は出たが、約7割の改善率を果たし、無

事社会に出て活躍した人が119名という成果を見た。この経験から強い自信を持ち、「宿願の新農村の建設と感化事業に余生を捧げたい」と雄大な事業に着手する。大自然は人間を育ててくれると確信、北海道を選んだ。

大正2(1913)年9月、土地選定のため北海道に旅立ち、北海道・遠軽の地に広大な千町歩余りの原野(社名淵七百五十町歩、白滝三百町歩)を4300円余りで払い下げを受け、感化農場を開拓経営する。

家庭学校教師の鈴木良吉(東北大、農学部出身)と生徒3人は先遣隊として出発、一軒の小屋を作り幸助を待った。鈴木は幸助が連れてきた姪の吉田けいと結婚し、この地に根を下ろす。大正3(1914)年8月24日、近隣の人々に

来てもらい、原野で家庭学校北海道分校の開場式を行う。未開の原野で野ねず

み、蜂と戦って土地を開いていった。

大正8(1919)年、礼拝堂が竣工、これを中心に掬泉寮など家庭学校の寮校舎が成立、農具舎、牛舎などの新農場施設も作られる。周辺には小作地が広がる。幸助は小作人を入れた新農場を作り、その収入で家庭学校の生徒を育てる計画であった。

大正11(1922)年、家庭学校の開墾地は二百三十町歩、乳牛30頭でバター・チーズの生産、百町歩の山林への植林も始まる。生徒は自然と労働の中で人間性豊かに育ち、悪さ

をする生徒は東京に返すと言ったらおとなしくなつたという。

昭和6(1931)年、巢鴨の家庭学校で行われた奉教50年の感謝会后、幸助は2度目の脳出血で倒れ、7月に巢鴨の土地は売却、家庭学校長を牧野虎次にまかせ、名誉校長となったが、昭和9年2月5日、70歳で天国に旅立った。

高梁の地に育ち、神の愛に救われ、多くの人々の支援を得て、人々を悪から救おうと監獄改善から感化事業へと進んだ。家庭学校を始めて、一路白頭に至るまで努力した人生であった。



留岡幸助の著作の一つ「家庭学校」



北海道家庭学校の礼拝堂

この冊子は、高梁市の広報紙「広報たかはし」(平成18年11月号～平成19年3月号)に連載されたものです。

発 行 高梁市教育委員会
高梁市落合町近似286-1